

蠅を憎む記

泉鏡花作

上

いたづら為たるものは金坊である。初めは稗時の、月代のやうに素直に細く伸びた葉尖を、フツ／＼と吹いたり、臆たけた顔を斜めにして、金魚鉢の金魚の目を、左から、又右の方から視めたり。

やがて出窓の管簾を半ば捲いた下で、腹ンばひに成つたか、午飯の済んだ後で眠氣がさして、くるりと一ツ廻つて、姉の針箱の方を頭にすると、足を投げ仰向になつた。

目は、ばつちりとニいて居ながら、敢て見るともなく針箱の中に可愛らしい悪戯な手を入れたが、何を捜すでもなく、指に當つたのは、ふつくりした絲巻であつた。

之を指の尖で撮んで、引くり返して、引出の中で立てゝ見た。

然うすると、弟が柔かな足で、くるく遊び廻る座敷であるから、萬一の過失あらせまい為、注意

深い、優しい姉の、今しがた店の商賣に一寸部屋を
離れるにも、心して深く引出に入れて置いた、剪刀
が一所になつて入つて居たので、絲卷の動くに連れ
て、夫に結へた小さな鈴が、ちりんと幽に云ふから、
幼い耳に何か囁かれたかと、弟は丸々ツこい
頬に微笑んで、頷いて鳴した。

鳴るのが聞えるのを嬉しがつて、果は烈しく獨樂
やう、絲卷はコトコトとはずんで、指をはなれて引
出の一方へ倒れると、鈴は又一つチリンと鳴つた。
小な胸には、大切なものを落したやうに、大袈裟に
ハツとしたが、ふと心着くと、絹絲の端が有るか無
きかに、指に挟つて残つて居たので、うかゞひ、う
かゞひ、密と引くと、絲卷は、ひらりと面を返して、
絲はする／＼と手繰られる。手繰りながら、斜に、
寝轉んだ上へ引き／＼、頭をめぐらして、此方へ寝
返を打つと、絲は左の手首から胸へかゝつて、宙に
中だるみ為て、目前へ來たか、最う眠いから何の色
とも知らず。
自ら其を結んだとも覚えぬに、宛然絲を環にした
やうな、萌黄の圓いのが、ちら／＼一ツ見え出した
が、見る／＼紅が交つて、廻ると紫になつ

て、颯と碎け、三ツに成つたと見る内、八ツになり、六ツになり、散々にちらめいて、忽ち算無く、其の紅となく、紫となく、緑となく、あらゆる色が入乱れて、上になり、下になり、右へ飛ぶかと思ふと左へ躍つて、前後に翻り、また翻つて、瞬々をする間も止まぬ。

此の軽いものを戦がすほどの風もない、夏の日盛の物静けさ、其の癖、こんな時は譬ひ耳を押つけて聞いても、金魚の鱗の、水を掻く音さへせぬのである。

さればこそ烈しく聞えたわ、此の兒が何時も身震をする蠅の羽音。

唯同時に、劣等な蟲は、ぼつりと點になつて目を衝と遮つたので、思はず足を縮めると、直に掻き消すが如く、部屋の片隅に失せたが、息つく隙もなう、流れて来て、美しい眉の上。

留まると、折屈みのある毛だらけの、彼の恐るべき脚は、一ツ一ツ蠢き始めて、睫毛を数へるが如くにするので、豫て優しい姉の手に育てられて、然う為た事のない眉根を寄せた。

堪へ難い不快にも、餘り眠かつたから手で拂ふこ

とも為^せず、顔^{かほ}を横^{よこ}にすると、蠅^{はへ}は、こつて、頬^ほの邊^{あたり}

を下^{した}から上^{うへ}へ攀^{よぢ}んと為^する。

這^はふ時^{とき}の脚^{あし}には、一^{しゆ}種の粘^ね糊^{はり}が有^あるから、氣^けだる

いのを推^おして拂^{はた}くは可^いいが、悪^{わる}く掌^{てのひら}にでも潰^{つぶ}れたら
何^どうせう。

其時まで未だ些とは張の有つた目を、半ば閉ぢて、
 がつくりと仰向くと、之がため蠅は頬を嘗めて
 居た嘴から絲を引いて、ぶう／＼と鳴いて飛上つた
 が、聲も遠くには退かず。

瞬く間に翼を組んで、黒鮎先刻よりも稍大きく、
 二つが一つになつて、衝と、細眉に留まると、忽ち
 ほぐれて、ぴく／＼と、ずり退いたが、入交つたや
 うに覺えて、頬の上で再び一ツ一ツに分れた。

其の都度ヒヤリとして、針の尖で突くと思ふばかりの液體を、其處此處滴らすから、幽に覺えて居る種痘の時を、胸を衝くが如くに思ひ起して、毒を射されるかと舌が硬ばつたのである。

まあ、何處から襲つて來たのであらうと考へると、
 …其では無いか。

店へ來る客の中に、過般、眞桑瓜を丸ごと嚙りながら入つた田舎者と、それから歸りがけに酒反吐をついた紳士があつた。其の事を謂ふ毎に、姉は面を蔽ふ習慣、大方其の者等の身體から姉の顔を掠めて、暖簾を潜つて、部屋まで飛込んで來たのであらう、

・其よ、謂ひやうのない厭な臭氣がするから。

と思ふ、愈々胸さきが苦しくなつた。其に今がつくりと仰向いてから、天窓も重く、耳もぼつとして、氣が遠くなつて行く。――

焦れるけれども手はだるし、足はなへたり、身動きも出来ぬ切なさ。何を！

これしきの蟲と、苛つて、恰も轉つて来て、下まぶちの、まつげを侵さうとするのを、現にも睨めつける氣で、屹と瞳を据ゑると、いかに、普通見馴れた者とは大いに異り、一は鐵よりも固さうな、而して先の尖つた奇なる烏帽子を頭に頂き、一ツは灰色の大紋ついた素襦を着て、いづれも蟲の顔でない。

紳士と、件の田舎漢で、外道面と、鬼の面。――醜惡絶類である。「あ、」と云つたが其の聲咽喉に沈み、しやにむに起き上らうとする途端に、トンと音が、身體中に響き渡つて、胸に留つた別に他の一疋の大蠅が有つた。小兒は粉米の團子の固くなつたのが、鎧甲を纏うて、上に跨つたやうに考へたのである。疊の左右に、はら／＼と音するは、我を襲ふ三疋の外なるが、なほ、十ばかり。其の或者は、高波のやうに飛び、或者は網を投げるやうに駆け、衝と

ゆき、颯と走つて、恣に姉の留守の部屋を暴すので、
悩み煩ふものは只小兒ばかりではない。

小單笥の上に飾つた箱の中の京人形は、蠅が一齋
にばら／＼と打撞るごとに、硝子越ながら、其の鈴
のやうな美しい目を塞いだ。・・・柱かけの花活
にしをらしく咲いた姫百合は、羽の生えた蛆が来て、
こびりつく毎に、絶ゆげにも、あはれ、花片ををの
かして、毛一筋動かす風もないのに、弱々と頭を掉
つた。弟は早や絶入るばかり。

時に、壁の蔭の、晝も薄暗い、香の薫のする尊い
御厨子の中に、晃然と輝いたのは、妙見宮の御手の
劍であつた。一疋、ハツと飛退つたが、ぶつ／＼と
いふ調子で、「お刀の汚れ、お刀の汚れ。」と鳴い
た。

また氣勢がして、佛壇の扉細目に仄見え給ふ端嚴
微妙の御顔。

蠅は内々に、「観音様、お手が汚れます。」「け
がれ不淨のものでござい。」「不淨のものでござ

い。

と呟きながら、さすがに恐れて静まつた。が、暫時
して一個厭な聲で、「は／＼／＼は／＼、いや、恚又も

のも汚うなると、手がつけられぬから恐るゝことなし。はゝはゝこら、何うぢやい。」と、ひよいと躍つた。

トコトンノ、はらりく、くるりと廻り、ぶんと飛んで、座は唯蠅で蔽はれて、果は夥しい哉渦く中に、幼児は息が留つた。

恰も可し、中形の浴衣、繻子の帯、雪の如き手に團扇を提げて、店口の暖簾を分け、月の眉、先づ差覗いて、

「おゝ、大變な蠅だ。」

と姉か、しなやかに手を振つて、顔に觸られまいと、仰向きながら、煽ぎ消すやうに、ヒラヒラと拂ふと、そよ／＼と起超る風の筋は、佛の御加護、おのづから、魔を退くる法に叶つて、蠅の同勢は漂ひ流れ、泳ぐが如くに、むらくと散つた。

座に着いて、針箱の引出から、一絲其の色紅なるが、幼児の胸にかゝつて居るのを見て、「いたづらツ兒ねえ。」と莞爾、寝顔を優しく睨むと、苺が露に艶かなるまで、朱の唇に蠅が二つ。「酷いこと！」と柳眉逆立ち、心激して團扇に及ばず、袂の尖で、向うへ拂ふと、怪しい蟲の消えた後を、姉は袖口を

噛んで拭いて遣りなから、同じ針箱の引出から、二つ折、笹色の紅の板。

其れを紅差指で弟の唇に。一寸四邊をニして叉唇に。

花の薫が馥郁として、金坊は清々して、はツと我に返つた。あゝ、姉が居なければ、少くとも煩つたらう。

【完】